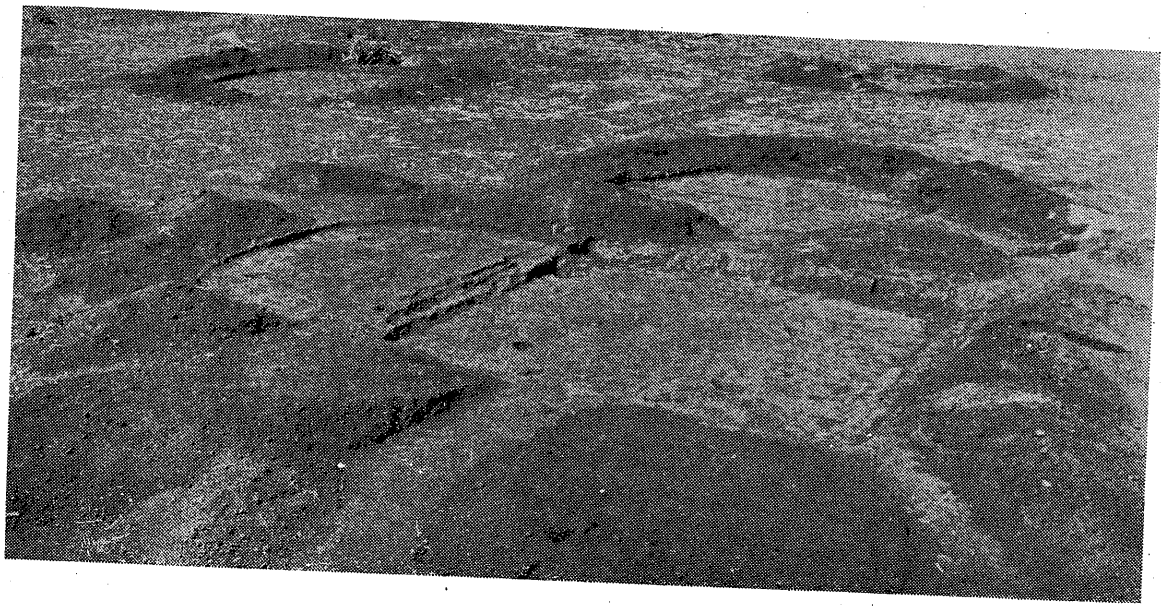
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和十五年度日吉彌生式竪穴調査報告 : 藤原工大假校舍敷地
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.2 (1943. 2) ,p.77a(219a)- 110(252)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿繪:日吉彌生式竪穴寫眞二葉
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430200-0077

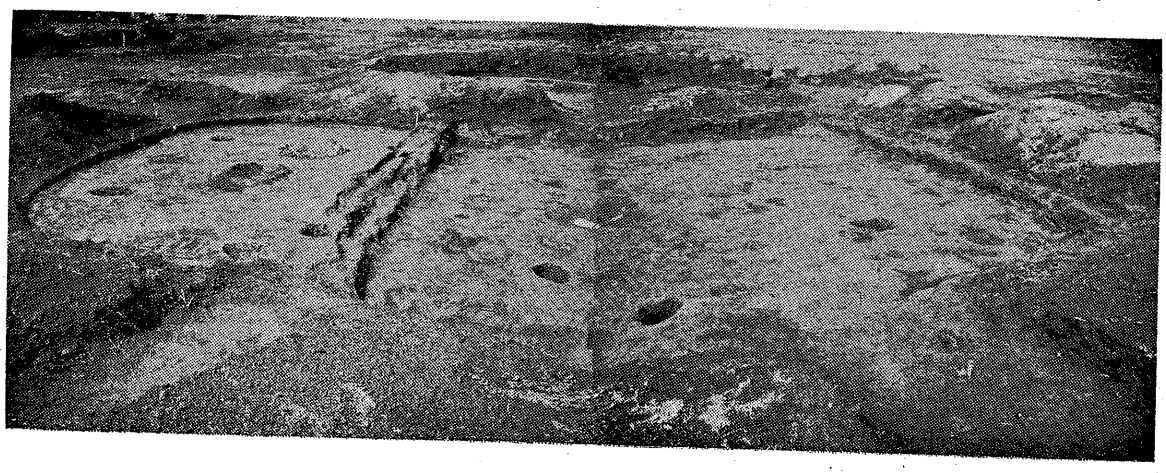
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

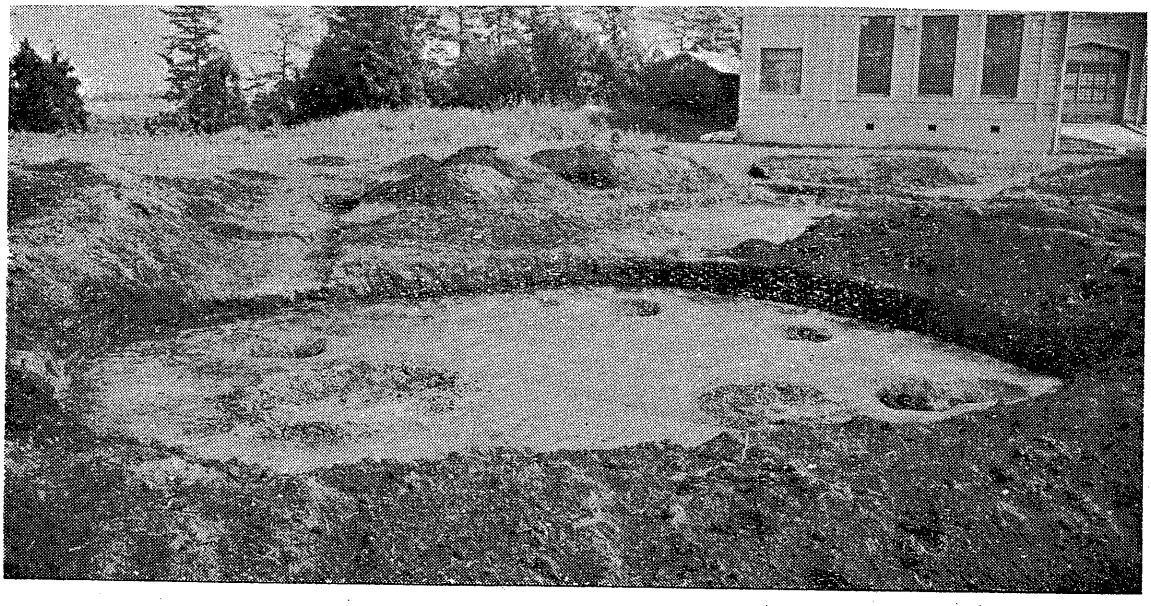
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寫眞第一　全　景



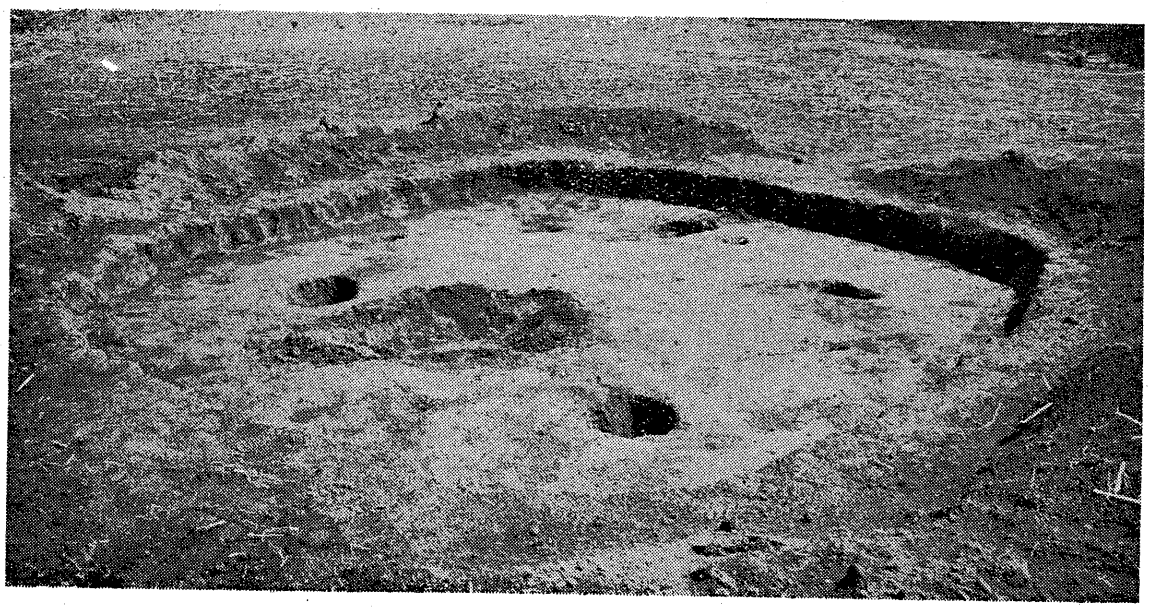
寫眞第二　第一五一、一五二號彌生式竪穴（竪穴東側より撮影）





寫眞第四　第一五五號彌生式竪穴　(竪穴西側より撮影)

寫眞第五　第一六一號彌生式竪穴　(竪穴西側より撮影)



昭和十五年度日吉彌生式竪穴調査報告

（藤原工大假校舍敷地）

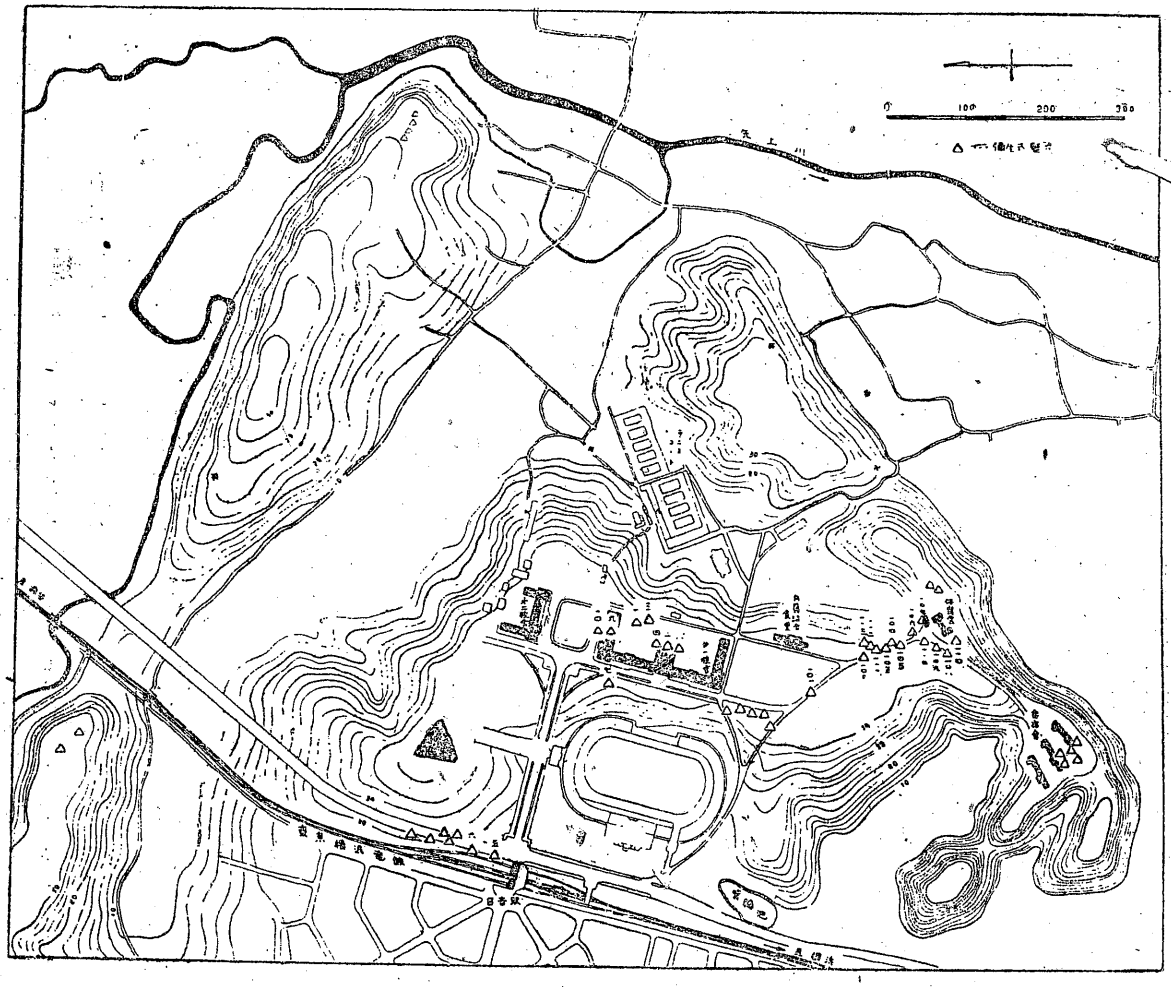
清水潤三

序言

去る昭和十五年七月より、翌十六年二月に亙り、三田史學會を中心として、日吉本塾構内に於て新たに發見せる彌生式竪穴住居址の調査が行はれた。今回は藤原工業大學の校舍增築中、地均工事によつて破壞された竪穴の殘存部を調査したに止つたが、なほ八個の竪穴に就き、平面並びに種々の遺構を知り得、且つ多量の遺物を蒐集し得たのであつた。最近に至り、整理も一段落を告げたので、此處にその概要を報告したいと思ふ。

なほ此の地に於ける竪穴の調査は、昭和七年五月を最初として、既に數回實施されて居るが、その結果に就いては本誌上に屢次報告されて居り、(註一)特に第十八卷第四號には西岡秀雄氏による總括的な報告が發表されて居る故、參照されんことを希望する。

第一圖　日吉臺彌生式竪穴分布圖　▲印今回發掘地點



位置（第一圖參照）

今回發見せる一群の竪穴は横濱市港北區日吉町、本塾構内北西隅、換言すれば東京横濱電鐵日吉驛東側の丘陵上に存し、昭和七年に調査された第五、六號竪穴の東方に隣接して居る。現在では藤原工業大學々部假校舍が建てられ、遺蹟は湮滅に歸してしまつた。

調査經過

昭和十五年六月、藤原工業大學々部假校舍建築の爲、前記地域内の地均工事が開始せられ、間もなく竪穴らしきものゝ發見が報ぜられた。三田史學會に於ては豫ねて豫

期せることゝして、直ちにこれが調査を行ふに決し、同月三十日、間崎万里、松本芳夫、松本信廣三教授、柴田常惠講師以下、會員保坂三郎、淺村一郎氏等によつて小試堀をなし、幸にして筆者も此の行に加はつたが、得る所なく、工事の爲に生じた斷面に二、三の竪穴と覺しき黑色腐植土の陷入せる部分を認め、彌生式土器片を採集したに止つた。時に恰も第一學期末試驗期に入り、會員の多くは調査に專念するを許さず、幸に地均工事終了後も竪穴の下半部が殘存することを確め、建築工事の遷延を許さざる關係もあり一度中止と決定したのである。その後筆者は七回に亙り餘暇を割いて現場に臨み、工事に伴つて竪穴の斷面が現れるに從ひ、その位置を實測圖に記入することを怠らなかつた。

次いで七月二十四日に至り、筆者は休暇に入ると共に、地均工事も略終了して全く地貌を一變した現場に赴き、實測圖を賴りに竪穴の位置を求め、上部を削平されてローム層を露出した地上に六個の竪穴址を發見し、これを第一五一號——第一五六號と命名した。

かくて豫想の如く右の竪穴はなほ主要部分を殘存して居たので、八月十六日諸般の準備完了を待つて調査を開始し、第一五三號を手始めに、九月八日迄連日好天に惠まれ、第一五一、一五二、一五三、一五五號及び新たに發見せる第一六一號の五個の調査をすゝめ、豫期以上の好結果を收めることが出來た。爾來實測圖補正等の爲、筆者は頻繁に現場に臨んだが、工事の進展に伴ひ、右竪穴群の北西方になほ竪穴數個の存在が知られ、校舍建築も豫定より延引する狀態にあつたので、冬期休暇を利用して調査を續

行することゝなり、十二月十三日より翌年二月二日に至る間、十六回に亙り、第一六二、一六四、一六五號三個の竪穴を調査したのである。

以上が調査經過の概要であるが、此の間、間崎、松本芳夫、松本信廣、柴田の諸先生には終始絶大なる御援助と、懇切なる御指導を賜り、椎野英司君を初めとして、本塾史學科學生諸君、豫科學生久保田耕一、佐々田良二の兩君は、炎天下或は寒風吹きすさぶ中に助力を惜しまれなかつた。此の諸先生の御厚意と學生諸君の熟意がなかつたならば、酷暑酷寒を冒し、且つ時間と勞力不足の惡條件下に斷行された今回の調査は恐らく失敗に終つて居たに相違ない。記して此處に衷心より感謝の意を表する次第である。

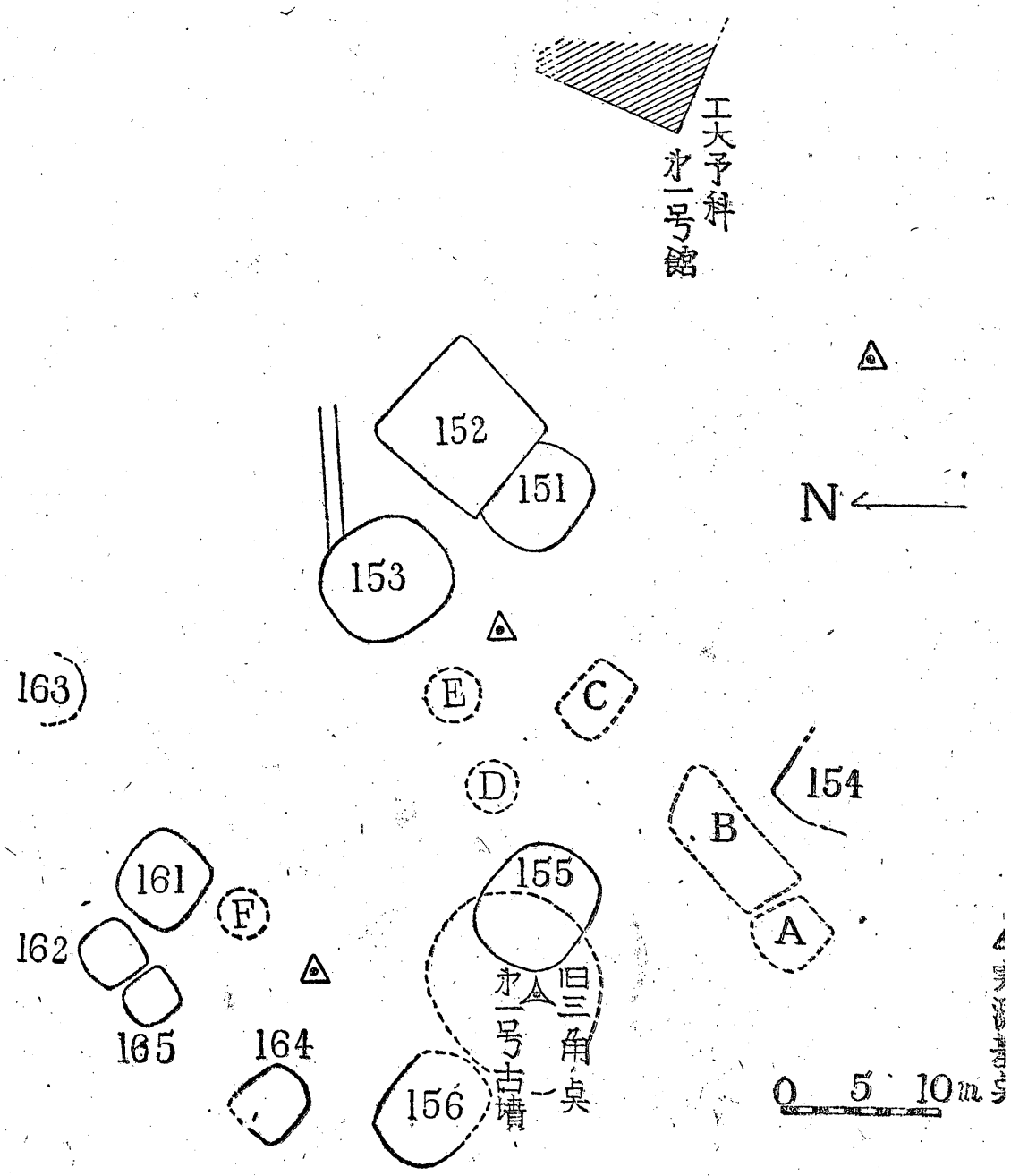
註一、史學十一ノ二、十二ノ一、十五ノ三。

竪穴（第二圖參照）

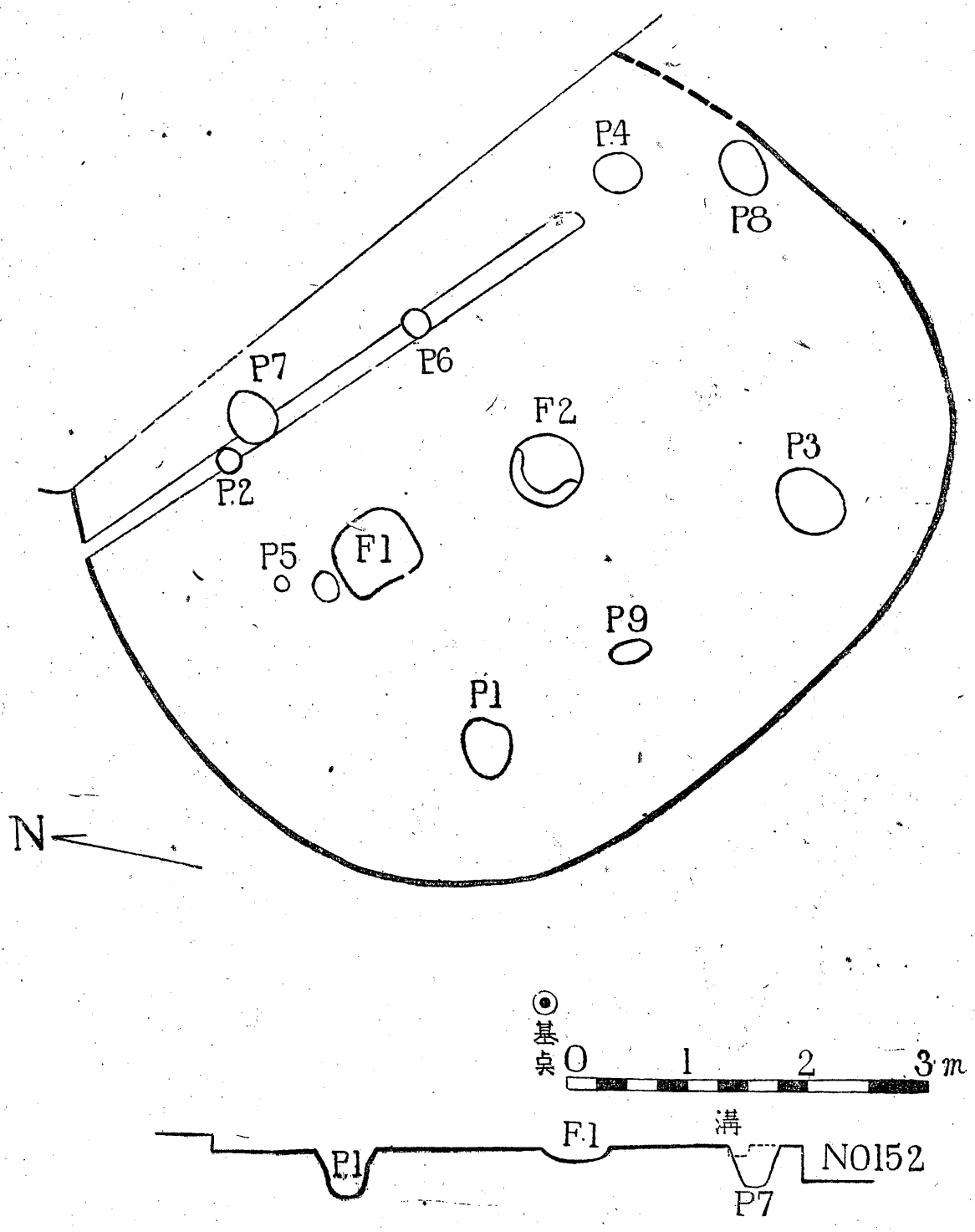
此の度發見した竪穴の數は十一個に上り、更に地均工事によつて湮滅に歸したもの六個に及んで居る。(註二)そのうち七月發見のものを、第一五一――一五六號、八月以降發見のものを第一六一――一六五號と命名した。

而して十一個の中、第一五四、一五六、一六三號の三個は殘存部極めて少く、十分なる結果を得る望みがなかつたので、これを除く他の八個が直接調査の對象となつた。次に個々の竪穴に就き記述を進め

第二圖


工大予科
ホ一号館
152
151
153
N
163
E
C
D
154
B
A
161
F
162
155
ホ一号古墳
旧三角点
165
164
156
0 5 10m

第三圖



よう。

第一五一號（第三圖參照）

六月三十日最初に現場を訪れた際、斷面を現はして居たもので、八月二十三日腐蝕土を除いて調査を試みた。

その結果地均工事の爲、上部約四十糎を失ひ、殘存部の深さ西壁にて十七糎、南壁にては僅かに八糎に過ぎず、東側に於ては約一米の間全く側壁を失つた部分もあり、且つ東北部の約五分ノ一は第一五二號の爲に切り取られて居る等、かなり原形を損して居たが平面は楕圓に近く、所謂隅丸方形で長徑七米、短徑は復原して六米内外なる事を確め得た。

床は周緣に近い一部を除く外極めて固く、充塡せる黑土とは明瞭に區別された。この部分は黑土とローム が混じて固められて居り、約五糎下方に至つて純ローム層に達する。從來我々は往々竪穴床面の檢出に困難を感じたが、本號に於てはこの爲容易に檢出する事が出來た。

本竪穴には隣接の第一五二號に近く、一條の溝が床面に見出された。卽ち北端側壁下に起つて、南東に向ひ、第一五二號の西南壁と略並行して五米伸び、南側壁には達せず、中途で終つて居る。幅は北端にて十二糎、南端にて二十一糎、深さ中央最深部にて十糎である。（第三圖參照）柱穴p.2、p.6、p.7は此の溝に貫かれて居り、同p.4はその延長一線上に位置する故、柱と關係ある施設の遺構かとも疑はれ、又第一

五二號の外部施設の一部かとも考へられたが遂にその性質を明かにすることが出來なかつた。なほ今回調査した八個の竪穴に於ては、側壁に接する周緣部に溝をめぐらしたものは全く見られなかつた。

柱穴、四個の主柱穴p.1 p.2 p.3 p.4以外に二個p.6 p.7計六個あり、他にも柱穴と決するには稍〻躊躇される穴p.5 p.8 p.9がある。

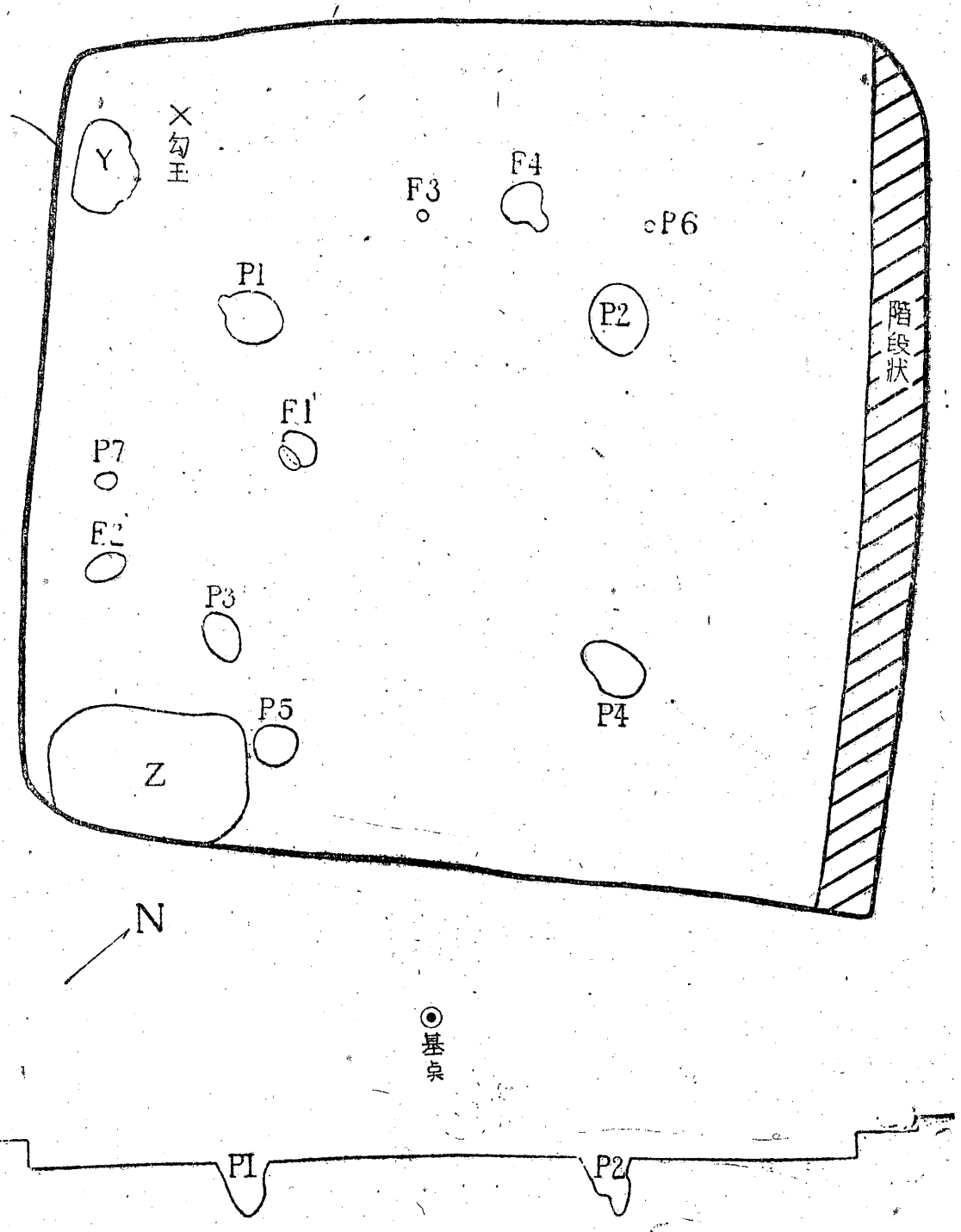
第一五二號柱穴實測表（註三）

柱穴番號	口徑	深さ
p. 1	43糎	40糎
p. 2	24〃	45〃
p. 3	60〃	41〃
p. 4	42〃	43〃
p, 5	16〃	5〃
p. 6	25〃	32〃
p. 7	43〃	35〃
p. 8	50〃	18〃
p. 9	30〃	10〃

右の四個の主柱穴の中p.2は特に小形であり、p.6がその副柱となつて居たらしく思はれる。又後述の理由より、p.6 p.7何れかゞ第一五二號に屬するものではないかとの疑問が生ずるのであるが、現在これを決定する資料に缺け斷定するに至らない。p.3は複雜な窪みを有し、支柱を併せ立てたものと思はれる。（第十圖參照）

爐址、爐址は二個檢出され、そのうちF.1は柱穴p.1 p.2の中間にあり、長徑一米の矩形をなし、深さ十三・四糎、上半六糎內外は灰が滿たされて居り、特に表面近い厚さ約一糎は赤褐色を呈し、極めて固く、恰も煉瓦を見るやうであつた。灰層下には燒土が充滿して居た。又爐址南端には長さ五十糎、幅十糎の白色粘土狀灰層が床上五糎程突出し、堤狀をなして存した。なほ此の爐址の北方五糎を隔てゝ、徑二十五糎圓形に床が燒けて居る部分がある。F.2はF.1の南方、本竪穴の中央にある。徑六十糎、深さ八糎圓形の窪みで、西半に馬蹄狀に小量の燒土を見出したのみである。

第四圖



竪穴西端壁より柱穴p.1を覆ひ、長さ一米四十糎幅六十糎の廣さに黑色腐植土と混じ木炭を多量に含む燒土の層が、下方は床に接し、現存壁高と略〻同じ高さ迄充滿して居るのが發見された。斯樣な例には第一五二、一五五、一六二號に於て遭遇したが燒土を除去すると、床面上には何等異狀なく、恐らく後に投棄されたものと考へられる。

出土遺物は土器片のみにて、中央より南部にかけて多く見出された。

第一五二號（第四圖參照）

六月三十日第一五一號と共に斷面を見たもので、七月の作業によつて殘存せることを確め、八月二十一日から九月五日迄、細部の調査を實施した。八個の竪穴中最大の規模を有し、且つ平面が方形をなす點、日吉に於ては他に類例少きものである。卽ち長徑八米八十糎、短徑八米六十糎に及び、深さも最も深く、地均工事の爲四十五糎內外削られたにも拘らず、なほ四十糎に達する。東北側壁には幅五十糎、床上二十五糎の高さを有する階段狀の部分があり、大略四本の主柱穴を連る線內に竪い床面を有した。更に第一五一號と重複して造られて居ること前述の如くである。

柱穴、四本の主柱穴p.1 p.2 p.3 p.4の外、p.5を加へて五個發見されたが、四個の主柱穴中口徑の稍小さいp.3の傍らにp.5が存するのは注意を惹く。p.1は一端に淺い支柱を受けたと思はれる小穴を有し、p.2又二段に造られて支柱の存在が窺はれる。（第十一圖參照）他になほp.6 p.7があるが直ちに柱穴とは決定し兼ねた。

第一五二號柱穴實測表(註三)

柱穴番號	口徑	深さ
p. 1	65糎	52糎
p. 2	60〃	57〃
p. 3	50〃	51〃
p, 4	65〃	51〃
p. 5	45〃	62〃
p. 6	10〃	14〃
p. 7	21〃	8〃
穴 Y	約1米	24〃
穴 Z	約2〃	25〃

本竪穴を一見して直ちに氣付くことは、規模大なるに比し柱穴が細く、且つ四本の主柱が内側に偏在する點である。それ故從來考へられた如き構架法とは異つた樣式が採用されて居たかと疑はれ、更に前述せる第一五一號の溝、及び一部柱穴が本號に屬するものとも見られたので、いよ〳〵竪穴外部に、施設の存在が豫想されるに至り、外周の調査を試みたのであるがその結果は、豫期に反し何等得る所がなかつた。或ひは地均工事の爲、湮滅に歸したものかもしれない。

爐址は、楕圓形で長徑四十糎、深さ五糎、燒土が充滿して居た。F.2は楕圓形で長徑四十糎、二糎の厚さに燒土を見たが、位置も北方に偏し、常時使用せる爐とは思はれない。F.3は直徑十糎の圓形で、あまりに小さく、燒土の厚さも一糎にすぎない。F.4は楕圓形で長徑四十五糎、深さ四糎五で燒土の量は稍〻多い。右の如く爐址と思はれるものは四個あつたが、餘りに小型であり、燒土の量も少く、他の竪穴の如く大形の爐址を見出さないのは著しい特徴である。

又南隅、西隅にかなり大きな窪み（第四圖YZ）がある。此の種の凹所は、以前第一一一號にも見られ、西岡氏は貯藏所かとされたが(註五)、なほ性質未詳である。但し今回Zの南端にて數個の復原可能な土器を發見したことは特記さるべきであらう。

出土品は西隅に近く、床面に接して土製匂玉一個を發見した外、多量の土器がある。土器は中央部に多く埋沒して居た。

更に第一五一號に見た如き床面と關係なき燒土、木炭の層も七ヶ所に存し、大なるものは二米四方に及んで居る。

上記の如く本竪穴は

1　平面方形を呈すること。

2　他に比して深く堀られてゐること。

3　主柱穴が細く且つ內側に偏在する點より見て、他と立面が相違する如く思はれること。

4　大形の爐址を有しないこと。

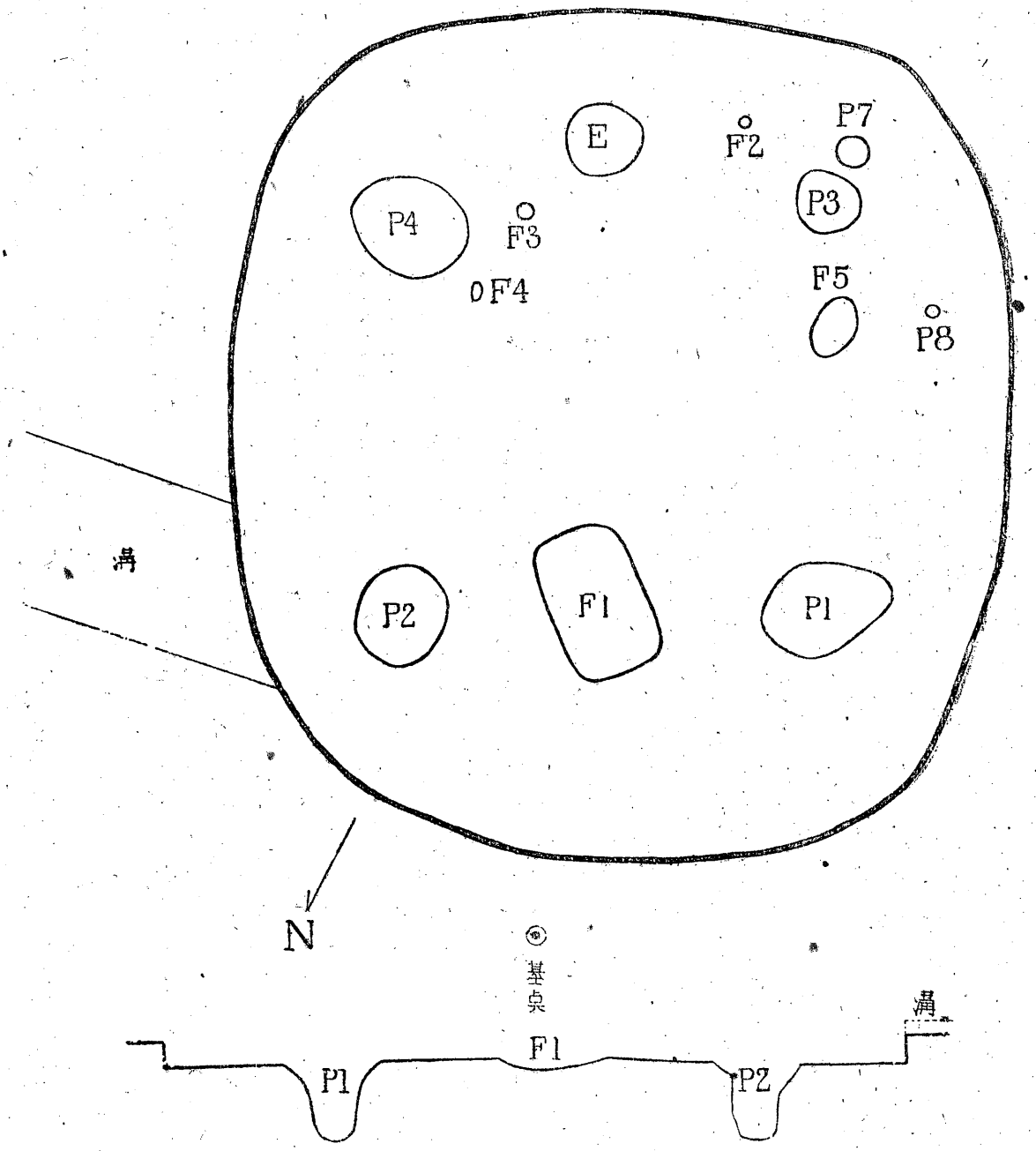
5　階段狀の部分を有すること。

等他に類を見ない特殊な點が多く、極めて興味ある竪穴と云ふべきである。

第一五三號　（第五圖參照）

七月一日に發見した竪穴斷面がこれに當るらしく、調査は八月十七日より二十三日に及んだ。約四十糎削られたにも拘らず、殘存壁高東壁にて四十糎、西壁にて二十五糎を計る。平面は楕圓に近き隅丸方形で、去る昭和十一年筆者が西岡氏と發堀した第一一一號と酷似して居り、長徑八米、短徑七米二十五

第五圖



糎、大形の部類に屬する。床面は固められた形跡なく、一樣の堅さを呈する黑土を除くと直ちに軟い純ローム層に達した。

柱穴、主柱穴p.1 p.2 p.3 p.4と副柱穴p.7及び稍疑のあるp.8の六個を檢出した。p.1 p.4は楕圓形をなし、口徑一米二十五糎に及ぶ巨大なもので、p.2も一米に近いがp.3のみは口徑六十糎に過ぎず、約十糎を隔てゝ、副柱穴かと思はれるp.7を伴つて居る。かく四個の主柱穴の一が他に比して小さく、且つ副柱穴らしきものを伴ふ點は第一五一、一五二號に於ても見られた特徴である。（第十二圖參照）他に第一五二號に存したと同樣、性質不明の穴Eがある。

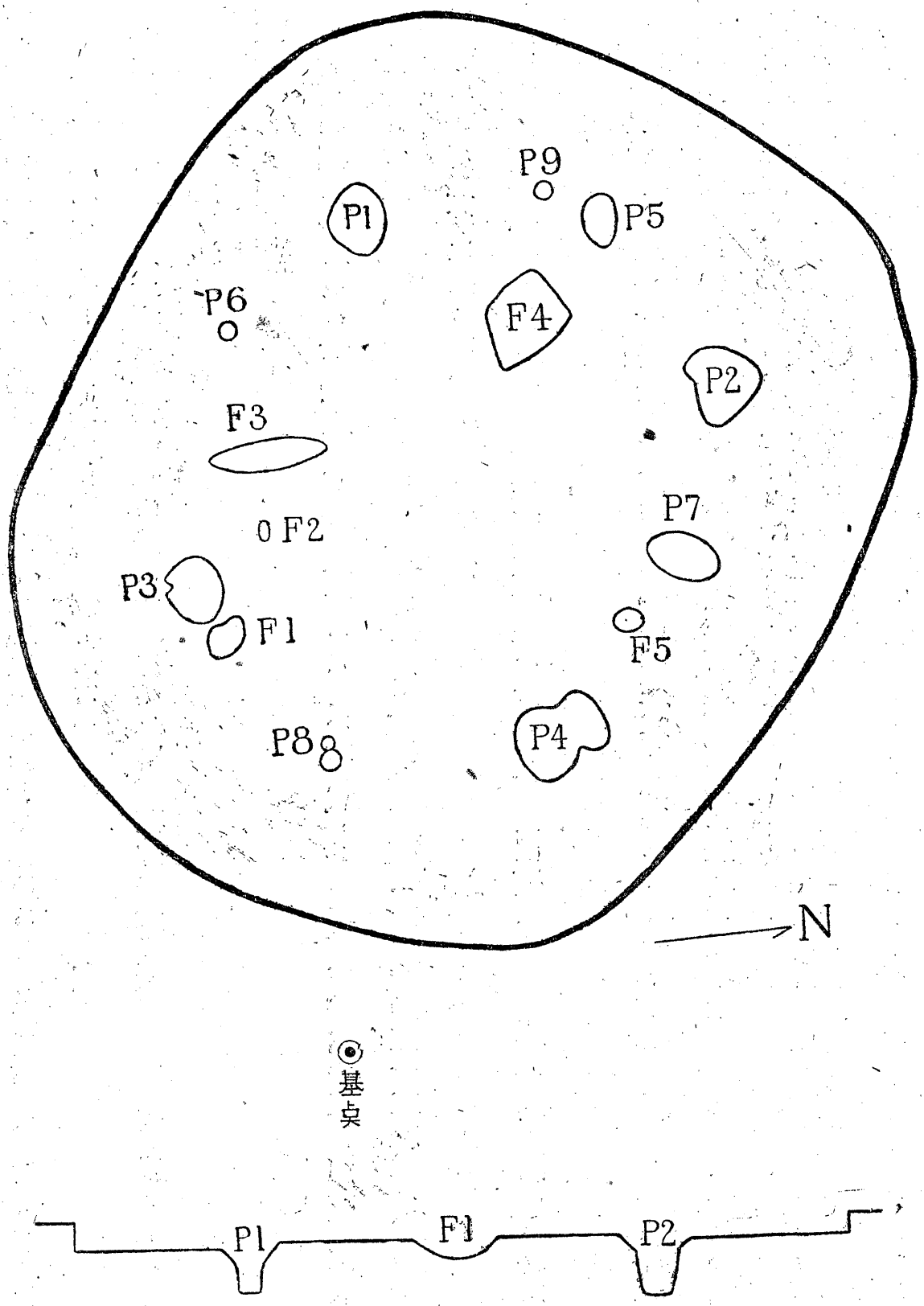
第一五三號桂穴實測表（註三）

柱穴番號	口徑	深さ
P. 1	125糎	73糎
P. 2	92〃	70〃
P. 3	60〃	74〃
P. 4	125〃	78〃
P. 7	30〃	25〃
P. 8	11〃	14〃
〃 E	70〃	27〃

爐址、F.1は柱穴P.1 P.2の中間にあり、深さ九糎、一米四十糎×九十糎の矩形を呈する。燒土は中央部に約三糎の厚さに存在したのみで、粘土の如き灰にて滿たされて居た。F.5は柱穴P.3の北にあり、長徑六十糎楕圓形を呈し、十糎の深さに燒土が充滿して居る。

此の竪穴の壁を檢して居る際、東壁の北端に近く、幅一米に亙り黑土が約十糎陷入せる部分を發見、出入口の施設かと疑ひ、直ちに黑土を除去して行くと、此處より東方に延びた溝の末端なることが知られた。此の種の溝は他に多くの例があり、日吉に於ても竪穴相互間を結ぶものが發見されて居り乍ら、（註六）その解釋に就ては未だ首肯するに足るものがないことゝて、大いに興味

第六圖



を唆られたのであつたが、工事の爲延長八米四十五糎以上に調査を進めることが出來ず、放棄の已むなきに至り、新しき資料を提供し得なかつたのは遺憾である。

出土遺物は朱彩有文壺形土器口頸部一個の外は土器片のみで、破片の大多數は中央部、純ローム層より五糎内外上方に見出された。

第一五五號（第六圖參照）

七月初旬斷面の現はれ居るを發見、次いで殘存せることを確め、九月二、三、四の三日間清掃調査を試みた。例によつて工事の爲五十糎内外削り取られて居り、北、東壁に於て十乃至十五糎、西、南壁に於て二十糎の壁高を示すに過ぎない狀態であつた。

平面は隅丸方形、長徑七米五十糎、短徑六米五十糎を計る。床面は壁に近い部分を除き固められて居た。

柱穴、主柱穴P.1 P.2 P.3 P.4以外各主柱穴の中間に四個の副柱穴と認むべきものP.5 P.6 P.7 P.8、更にP.5の西北に近くP.9の九個が存した。そのうちP.4は分銅形の平面を有し、底部に三本の柱を立てたと思はれる小穴を有する特殊なものであり、P.5も淺い柱穴ながら支柱を併せ立てたものらしく思はれ、P.8は二個の隣接した穴より成つて居る。（第十三圖參照）

爐址、P.4は柱穴P.1 P.2の中間にあり、長徑七十糎の不整方形を呈し、燒土層の厚さ十糎、その上を約七

第一五五號桂穴實測表

桂穴番號	口　徑	深　さ
P. 1	50糎	42糎
P. 2	58〃	48〃
P, 3	48〃	65〃
P. 4	80〃	41〃
P. 5	40〃	38〃
P. 6	17〃	9〃
P. 7	55〃	19〃
P. 8	18〃 12〃	9〃 10〃
P. 9	16〃	9〃

糎の灰層が覆つて居た。F.1は徑三十糎、燒土の厚さ六糎、F.2 F.3 F.5は厚さ一・二糎の燒土を見たに過ぎず、爐址と斷ずるのは早計に失するかもしれない。

又床面とは無關係に、多量の燒土が推積して居た點は、第一五一、一五二號と同樣であつた。

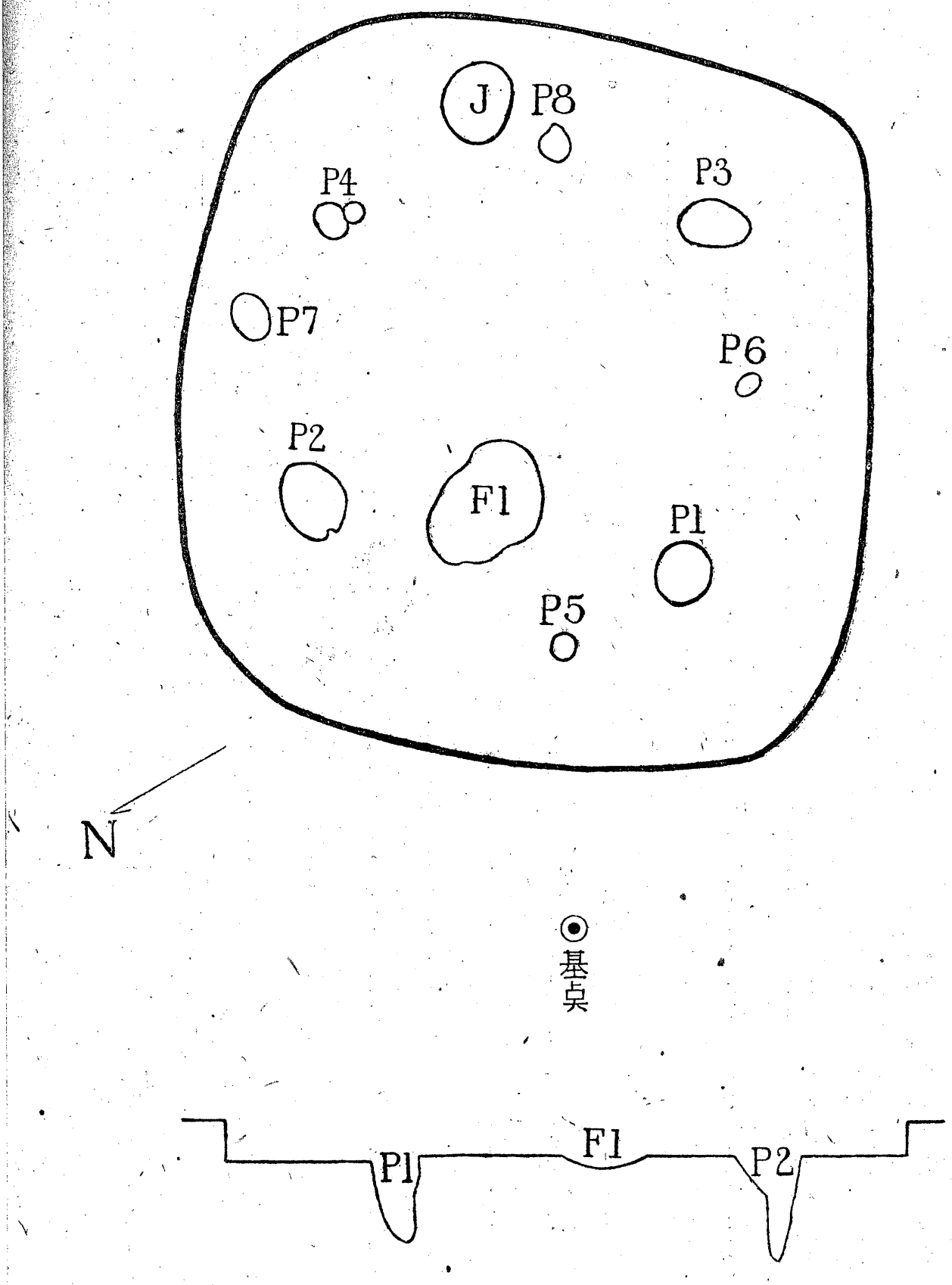
出土土器片は殘存部少きに比して多量であり、西壁、北壁に近く復原可能なものが多く、中でもF.4の西方に完全な壺形土器及び高杯を發見した。

なほ本號北半部は昭和六年發掘調査された矢上第一號古墳(註七)の封土下に存し、竪穴と古墳の關係に何等かの發見が期待され、地均工事中も調査の際にも十分なる注意を拂つたのであつたが、遂に得る所なくして終つた。

第一六一號（第七圖參照）

八月十六日筆者が調査準備の爲現場に臨んだ際、既に存在を知り得た六個の外に、なほ一個の竪穴を認め、第一六一號と命名した。當時は地均工事の支障となる爲、同月二十八日土器を採集したに止め、九月四・五日の兩日に亙つて調査を試み、その結果殘存部の壁高二十八糎內外、隅丸方形の平面を有し、長徑五米五十糎、短徑五米二十五糎の竪穴なることが判明した。床面は周邊の部分を除いて固められて

第七圖



居たが、他に比して著しくない。

柱穴、四個の主柱穴P.1 P.2 P.3 P.4及びその中間にP.5 P.6 P.7 P.8の八個が見出され、その配置は珍らしく整然として居る。柱穴中P.4は隣接した二個の穴より成るものである。（第十四圖參照）

第一六一號柱穴實測表（註三）

柱穴番號	口　徑	深　さ
P. 1	50糎	64糎
P. 2	60〃	79〃
P. 3	55〃	70〃
P. 4	22〃 17〃	17〃 60〃
P. 5	21〃	10〃
P. 6	24〃	8〃
P. 7	37〃	14〃
P. 8	26〃	23〃
穴　J	60〃	30〃

他に性質不明の穴Jがある。

爐址、F.1一個のみ存した。位置は主柱穴P.1 P.2の中間にあり、長徑一米、不規則な楕圓形で中央部の深さは十糎に及ぶ。厚さ約三糎の燒土層の上を混土灰層が覆つて居た。

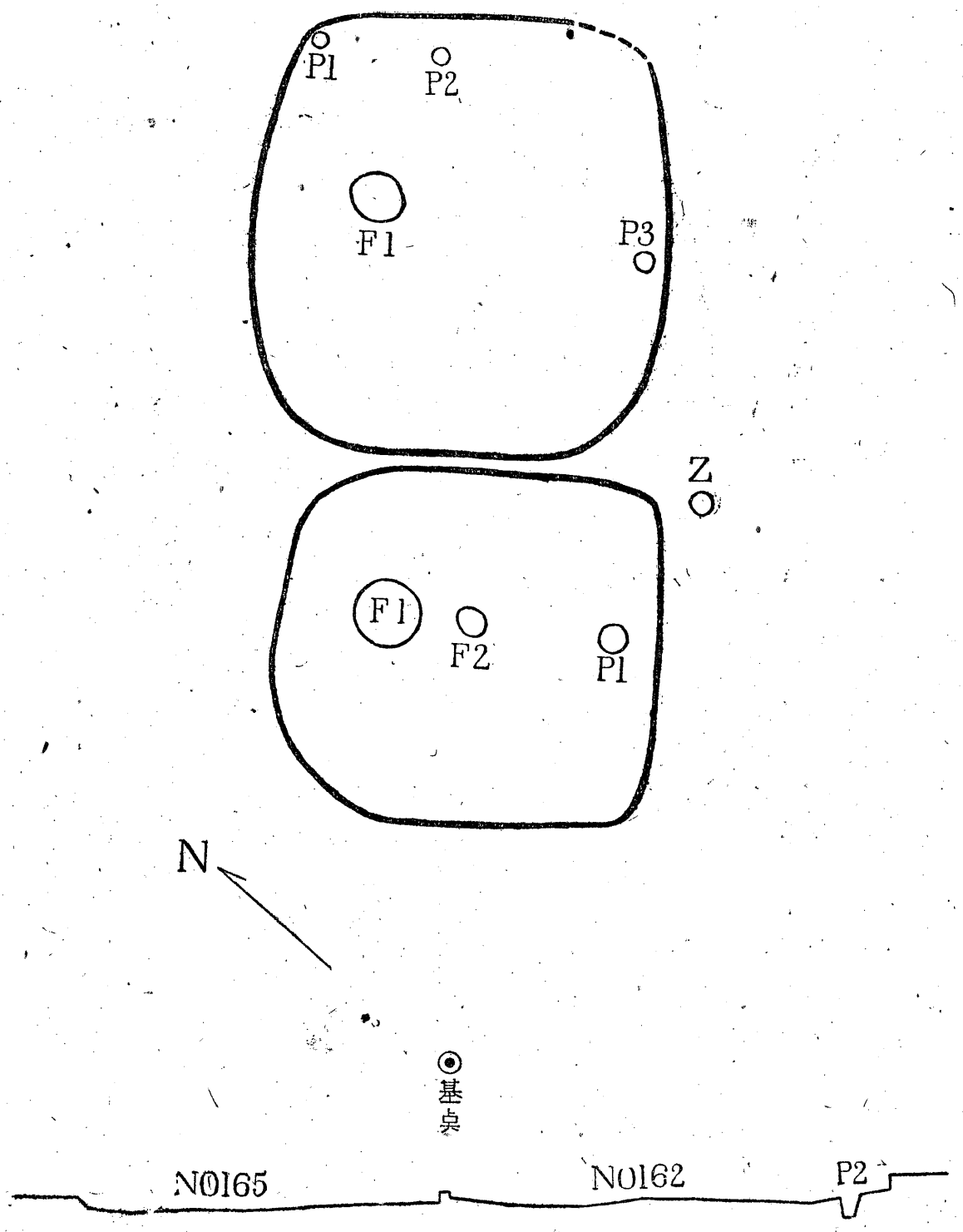
出土遺物としては土錘が一個あり、土器の量も多く、就中柱穴P.3 P.4の中間には床面に接し、完全土器一個と、數個の復原可能な土器が壓碎されたまゝの狀態で見出された。

第一六二號（第八圖參照）

八月二十八日第一六一號の西約一米を隔てゝ更に本號の存在を知り、土器片多數を採集した。爾來調査の豫定なかりしも、校舍建築工事の延引に幸ひされ、十二月十三日より二十六日に至る間、第一六四、一六五號と共に調査するを得た。

本竪穴は隅丸方形にて長徑三米九十五糎、短徑三米七十糎。殘存側壁の高さは僅々十五糎に過ぎない。

第八圖



床面は中央部のみ固められて居る。

柱穴、三個不規則な位置に發見せるのみで、特に主柱と認むべきものはない。此の點は後述の第一六四、一六五號も同樣であつて、規模大なる前述五個の竪穴とは形式を異にするものである。

第一六三、一六四、一六五號穴實測表（註三）

竪穴番號	柱穴番號	口徑	深さ
162	P. 1	15糎	20糎
〃	P. 2	17〃	20〃
〃	P. 3	20〃	15〃
164	P. 1	45〃	53〃
〃	P. 2	36〃	37〃
165	P. 1	27〃	23〃
	穴 Z	20〃	30〃

爐址、F.1、徑五十糎圓形に近い。中央北西壁寄りにあり、深さ七糎、燒土は小量しかなかつた。

なほ爐址を中心とし、床面とは無關係に長さ一米、幅七十五糎の燒土層が見られた。

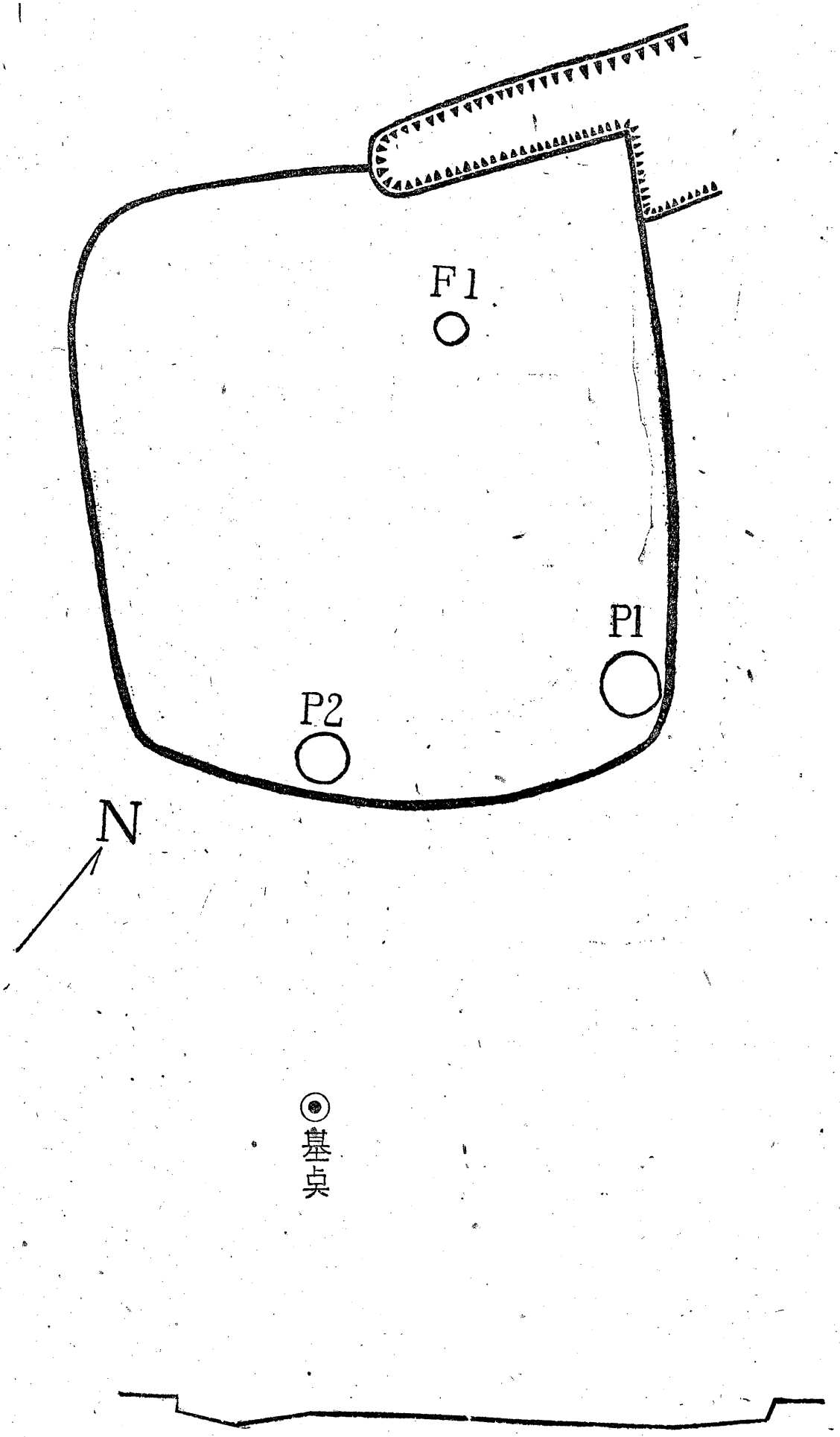
第一六四號（第九圖參照）

八月二十一日偶然第一五六號の北方約六米の所に發見したもので第一六二號と共に調査を行つた。

殘存側壁の高さ十乃至十五糎に過ぎず、平面は隅丸方形、長徑四米三十五糎、短徑三米八十五糎、北側の一部を破壞されて居る。爐址の附近に固められた床面の痕跡を見たのみで、竹の根による攪亂甚だしく、床の判定に困難を感じた。

柱穴と思はれるものは東南壁に近い二個のみであり、竪穴外周をも調査して見たが、竹の根が蔓り、豫期の結果を得ることが出來なかつた。

第九圖



爐址中央北寄りに偏して徑二十糎、深さ十糎のもの一個を檢出した。これも底部のローム層が燒けて居るといふ程度にすぎない。

小形且つ殘存部分少きにも拘らず、土器の量多く、復原されたもの五個に及んだ。

第一六五號（第八圖參照）

九月二十一日の發見に係り、十二月に入つて、前二者と同時に調査を試みた。

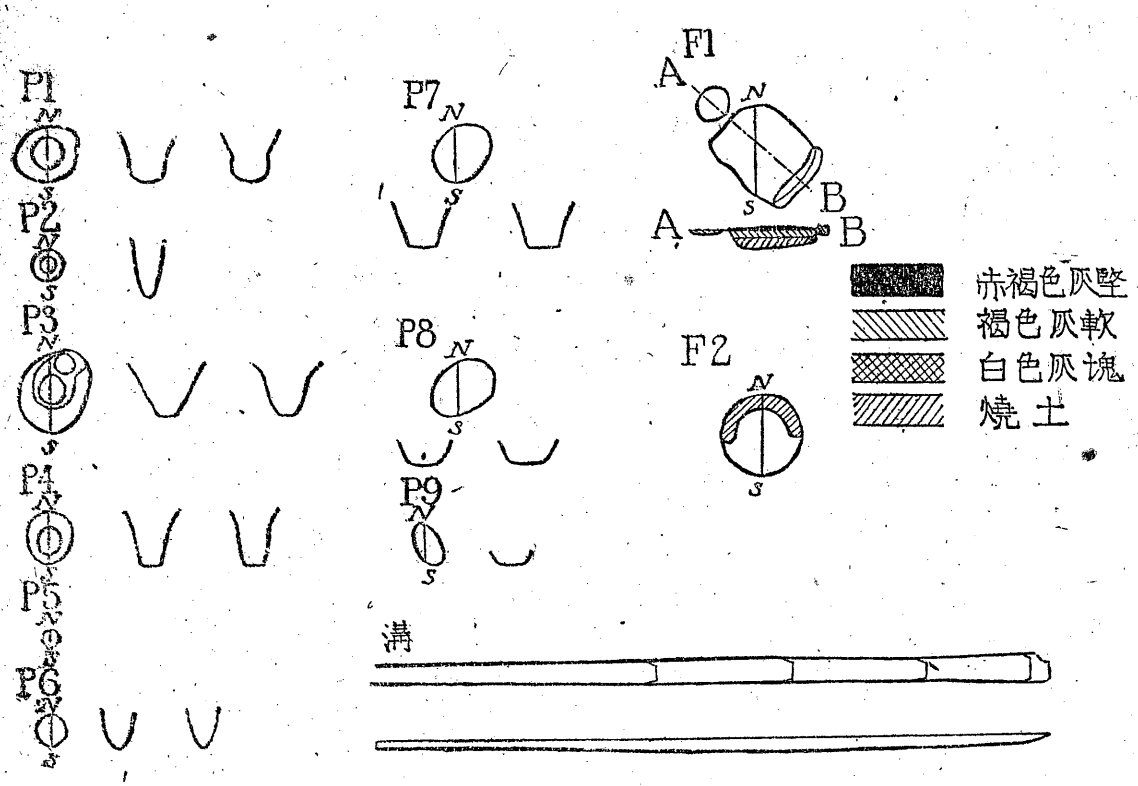
殘存側壁の高さは僅かに十糎、隅丸方形にて長徑三米四十五糎、短徑三米二十五糎、今回調査せる中最小の竪穴である。

東北に隣接せる第一六二號との間隔は十五糎内外であり、狹い所では十一糎に過ぎない。然も兩者の側壁は互に並行し、第一五二號が第一五一號の一部を無雜作に破壞して、營まれたのとは趣を異にして居る。

床面は中央約一米四方が固められて居り、その周圍には直接純ローム層が現はれて居る。他の竪穴に在つては、固められた部分の周圍には黑土を混じたローム層があり、純ローム層はなほ約五糎下方に見出されるのが普通であつて、かゝる例は見られなかつた。

柱穴は東南部に一個存したのみであつた爲、竪穴外部を調査する必要に迫られ、その結果東隅に接して穴Zを發見することが出來た。併し乍ら北隅に於いては何等の發見なく、他の二隅附近は竹の根に妨

第十圖



げられ、此の種竪穴の立面を知る手懸りを得るに至らなかつたのは遺憾である。なほ穴Zは第一六二號に屬する遺構かとも疑はれた故、その周圍をも詳細に調査したが、徒勞に終つた。

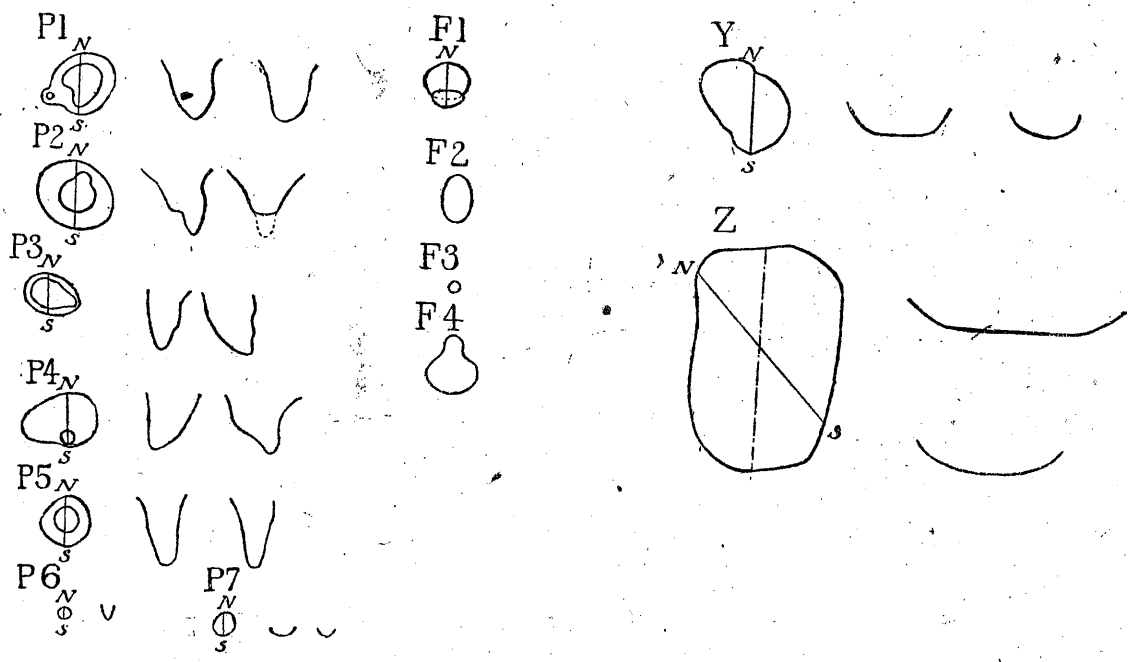
爐址、F.1は中央北寄りに存し、徑六十糎圓形で、深さ十六糎に及び、多量の燒土を殘して居る。その上に鉢形土器の大きな破片が發見された。F.2は略〻中央部に存し、徑三十糎の圓形を呈し、深さ五糎、燒土は少いが底部の堅く燒けたものが見出された。

又柱穴P.1に近く、側壁に接して厚さ十八糎を計る白色の灰層が存したが、床面とは全然關係がなかつた。土器の量は極めて少い。

其他の竪穴（第二圖參照）

先に觸れた如く、本遺蹟には今回調査の對象となつた八個を除き、なほ數個の竪穴が存在して居た。

第十一圖



それ等は工事の爲、或ひは湮滅し、或ひは大半を破壞され、若干の土器を採集し得たのみで特記すべきものがなかつたのであるが、我々の目に觸れたものは、當時の聚落研究の一資料たり得るかと考へ、全て實測圖に記入しておいた。

次いで藤原工大の工事は其後も續行され、北方、南方の傾斜面よりも竪穴が發見されたが遂に調査の機を逸したので、概略の位置を圖示し得るにすぎない。

註二、第二圖に示したA——Fの六個がそれであるがなほ我々の目に觸れずして終つたものも少くないであらう。

三、柱穴實測表に示した口徑寸法は全て最大口徑をとつた。

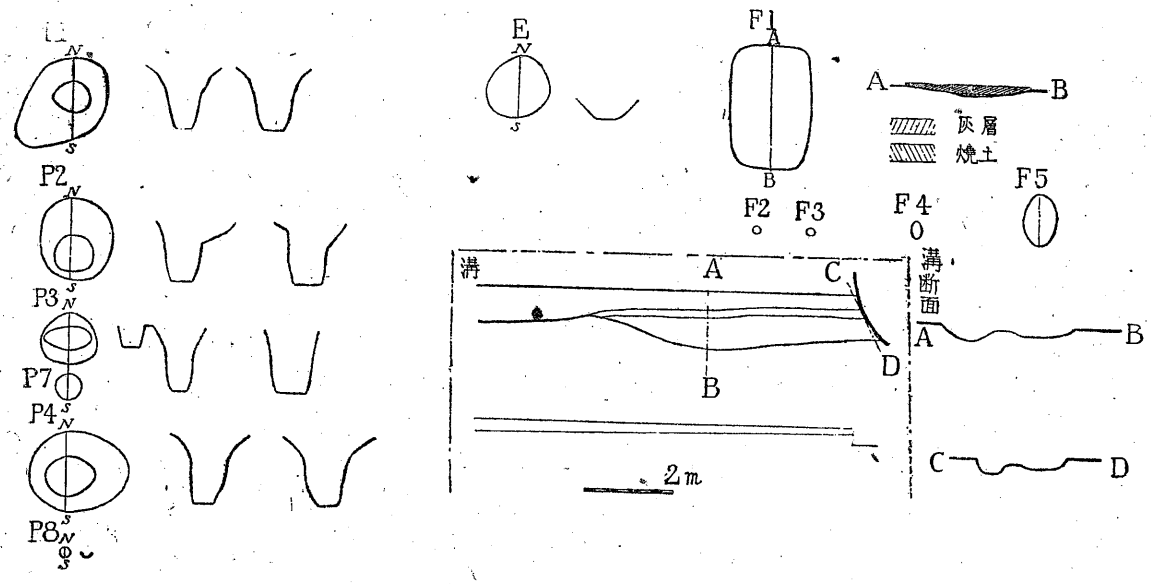
四、竪穴外の調査は後全部の竪穴に實施したがその結果は第一六五個に近く一個の柱穴らしきものを發見したに止つた。

五、史學第十八卷第四號一〇九頁。

六、昭和七年調査せる第二、第四號竪穴間、第二第八號竪穴間に見られた、前掲報告參照。

七、史學、第十二卷、第一號。

第十二圖



竪穴總括

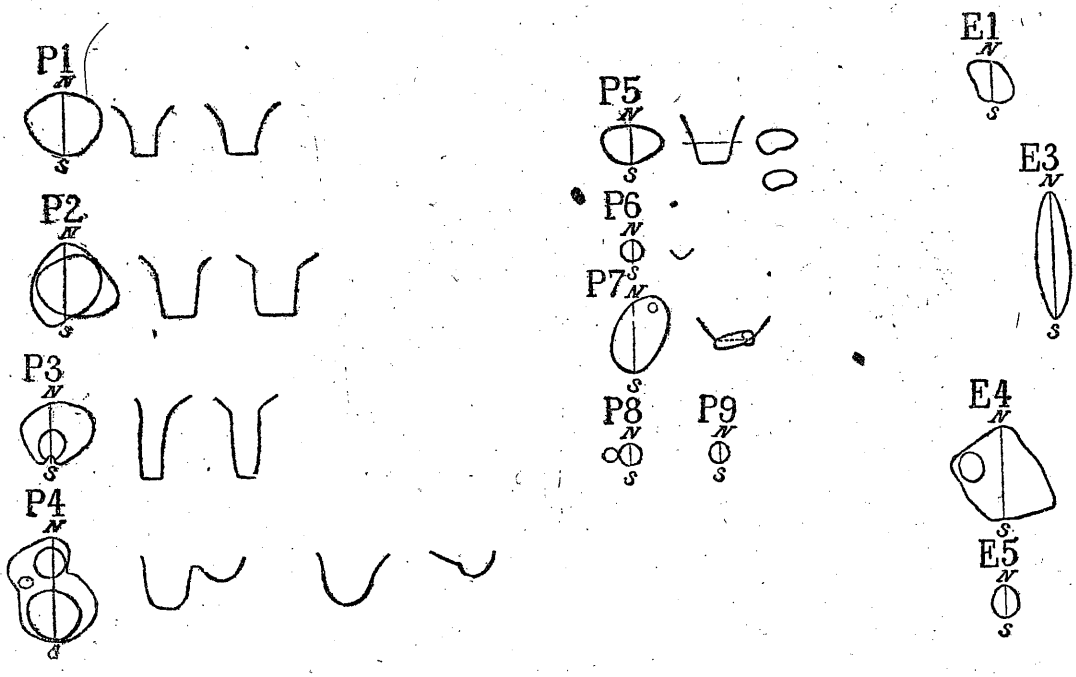
以上個々の竪穴に就き、記述を試みたが、その結果を整理すれば次の如くである。

一、平面

從來調査せる竪穴は第一一一號を除いては悉く原形を損したものであつた。それ故今日は平面の究明に意を用ひ、幸にして完存せるもの八個を調査し得たのは大きな收獲であつたと云ひ得る。（註八）即ち圓形と方形の中間形とも云ふ可き所謂隅丸方形のものが七個を占め、又從前發見の第一一一號を初め、他の殆んど全部が推定復原により、此の型に屬すると思はれる故、此の地に營まれた竪穴の一般的な平面は隅丸方形であることが略〻確實となつたのである。

他の一個卽ち第一五二號は方形で然も大形であり、昭和七年に調査した第一號と共に、方形竪穴の存在を示す珍らしい例である。

第十三圖



此の竪穴は先に述べた如く、他のものとは異つた點が多いので或ひは造營の年代に前後があるかと疑はれ、十分なる注意と期待とを以て調査を進めたのであつたが、何等の徵證も得られず、却て土器を整理した結果は他の遺物と同一であつて、此の二つの異つた平面を有する竪穴が、同時に存在して居たことを主張し得るに至つた。

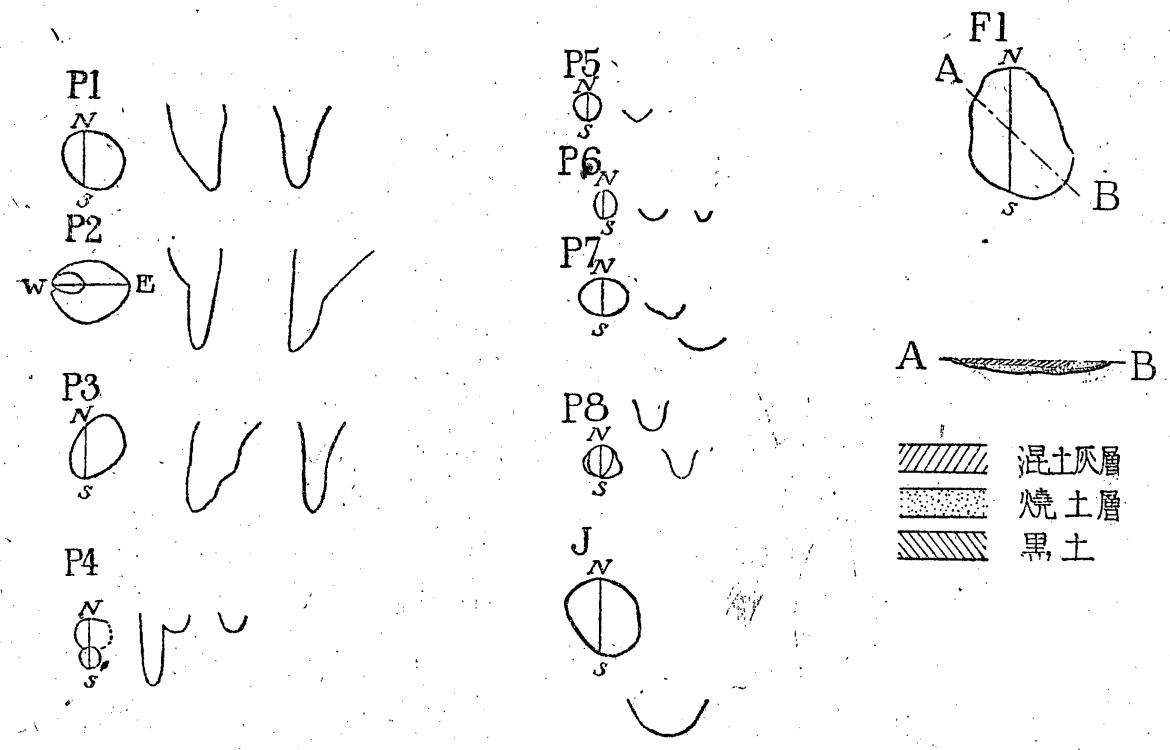
二、深さ

西岡氏は從來發見された竪穴の床面が、大體現地表下一米の深さに位置すると說いて居る。(註九) 今回の調査に在つては、上半五十糎內外を地均工事の爲削り去られたので、正確な記載をなし得ないが、大略六十乃至八十糎であつたやうに思はれる。卽ち西岡氏の所見より稍淺いが、先づ大差なく、當時の一般傾向に從ふものと見られる。

三、規模

次に竪穴の規模は表示せる如く、大は徑八米を超えるも

第十四圖



のから、三米餘の小なるものに至る迄區々であり、その大いさに一定の規範なかりしことを察し得る。此の結果は前二回の發掘に於ても同樣であり、一般住居以外特殊な用途に充てられた竪穴の存在を斷ずることも可能であらう。（註十）

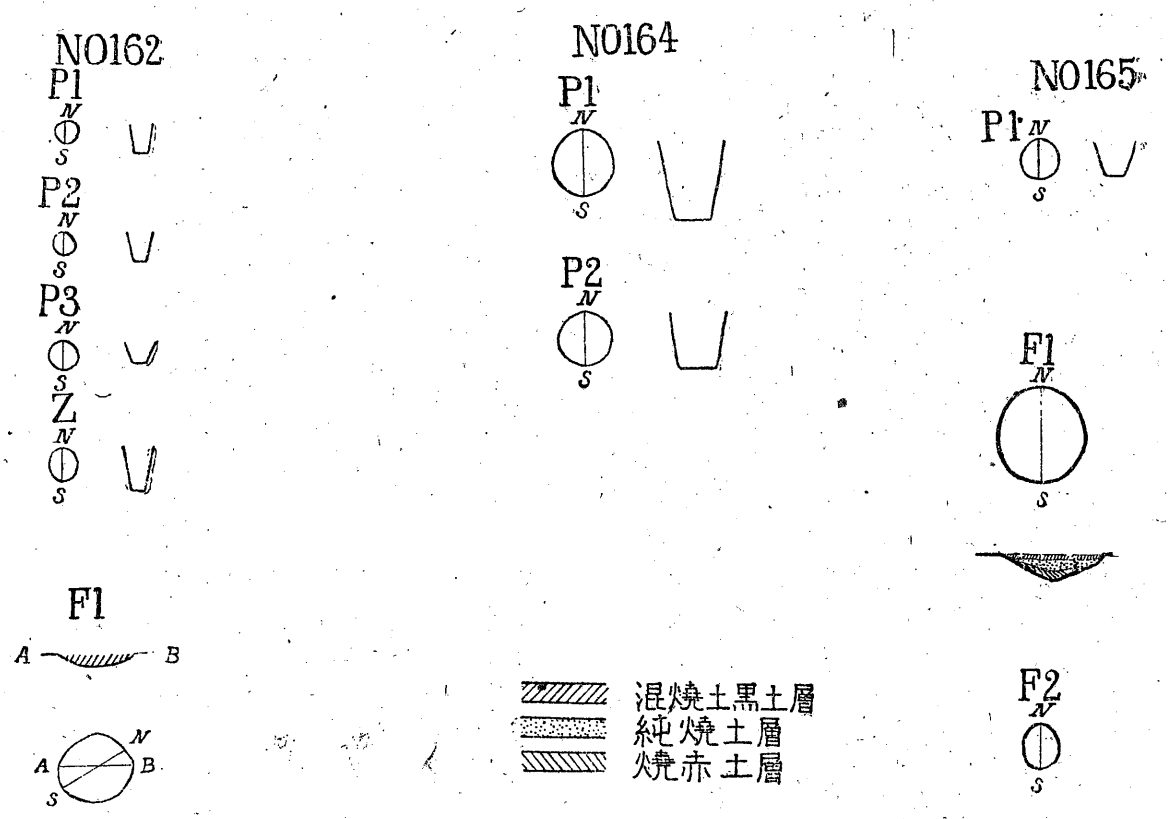
竪穴實測表

竪穴番號	長徑	短徑
151	700糎	600糎
152	880〃	860〃
153	800〃	725〃
155	750〃	650〃
161	550〃	525〃
162	395〃	370〃
164	435〃	385〃
165	345〃	325〃

四、床面

床面は概ねローム層が固められて居り、容易にこれを識別し得た。此の堅い部分は厚さ約五糎にて黑土を混じて居り、その下に通常のローム層を見出すこと、前述の如くである。然も此の堅い床は概ね天井が最も高く、居住者が最も活動したと思はれる支柱を連ねる線の內側に、爐を中心として存し、

第十五圖



竪穴周壁に近づくに從つて消滅するから、これが居住者によつて踏み固められた結果生じたもの、とする見解が妥當であるかに見える。然るに右の說に從へば斯樣な床面を有せず、黑土を除くと直ちに軟い純ローム層に達する例が、第一五三、一六四號の二竪穴に見られるのは如何に解すべきか判斷に苦しむことゝなるのであつて、特に前者は爐址の燒土、灰層の多量なりし點から推して、短時日に放棄されたものとは思はれず、固い床面が形成されずに終つた結果とすることは出來ない。それ故固き床面は單に居住者の足のみによつて生じたものではなく、矢張り意識的の工作によるものと考ふべきであらう。併し一方床がローム層を堀り下げたまゝの土間であつたか否かは又疑を存するのであつて敷物等の存在も考慮せねばならない。ともあれそれ等の解明は今

後に殘された一課題と云ふべきである。

なほ床を明かに識別し得なかつた二個の竪穴に於ては、已むを得ず黑土を全く除去して純ローム層を現はした。而して第一五三號の場合は、土器片が純ローム層上五糎のあたりに多く見出され、原位置を保つと思はれる壺形土器の頸部が倒立して、やはりローム層上四糎の個所から發見された故、當時の床面は純ローム層上五糎內外にあつたらしく思はれるが、なほ斷定は困難である。

五、柱穴

此の度發見した柱穴も又種々な示唆に富んで居り、竪穴家屋研究に數々の資料を提供するものである。

柱穴の配置は

(イ)、主柱穴四個、他に副柱穴を不規則な位置に有するもの。（第一五一、一五二、一五三號）

(ロ)、主柱穴四個、各主柱穴の中間に副柱穴一個宛を有するもの。（第一五五、一六一號）

(ハ)、柱穴の配置の不規則なるもの。（第一六二、一六四、一六五號）

の三種に大別し得る。(イ)の配置をとるものに在つては、主柱穴は概ね大型で、その平面は楕圓形、斷面は圓錐狀を呈し、最大口徑一米を超えるものさへある。(註十一) 又必ず一個丈けは小形であつて、近くに副柱穴と見るべきものを伴つて居ることは注目される。(註十二) 但し西岡氏の調査した第一一一號は、此の種の配置を有する一例で、柱穴の形狀も酷似して居るが、大さは四個とも略〻同大で、この樣な現象は見られなか

た。(ロの型に屬する竪穴の副柱穴には極めて淺いものがあり、疑問を懷く向も多からうが、床面の清掃に愼重を期した我々は、配置の整然たる上からも、敢て否定すべきものではないと確信して居る。又本型式の一例たる第一六一號竪穴の主柱穴P.4は、二個の相接する穴より成り、當然支柱を有したものと見られ、第一五五號P.4は大形で大小三本の柱を立てたらしく、その二本は同じく支柱と考へられる。後者の如く同一柱穴内に支柱を並立したと認められるものに、なほ第一五一號P.3、第一五二號P.1 P.2、第一五五號P.8があり、柱を補强する構造ありしことが窺はれるのである(第十、十一、十三圖參照)。(ハ)此の型式に入る竪穴に於ては、第一六三號に三個、第一六四號に二個、第一六五號に一個の柱穴を發見したに止り、その位置も全く不規則であつた。(註十三) 過去の調査に於ても第三號、第一〇二號の如き小形の竪穴に、此の種の例と見られるものがあつたが、今回は、それ等とは異り、平面の完全に殘存せる右の三個を發見し、改めて確認することが出來たのである。然もその所屬が明かでなかつたとは云へ、第一六二、第一六五號に近く、竪穴外に一個の柱穴と覺しきものを檢出し得たことは、未だ十分なる結果に達しないながら、此の種竪穴の立面を考へる上に重大な意義がある。卽ち以前にも、第二・四號の外周に斯樣な穴が見出されたことがあり、(註十四) 今後本型式に屬する竪穴の構造を明かにする發見が十分期待し得ることを示すものである。

六、特殊な穴

第一五三、一六一號に各一個、第一五二號に二個、柱穴とは異つた穴、若しくは窪みが床に穿たれて居た。その大さは各竪穴毎に柱穴と一括表示しておいたが、別に一定せず、その形狀も實測圖に見る如く、區々である。第一五二號の二個は共に中から完全に近い土器を出したが、外には何物も發見されて居ない。此の特殊な穴は第一〇四、一一一號にも見られ、西岡氏はこれを以て貯藏所に擬したが、なほ明かでなく、今回も新らしく土器を出すことを知つたのみであつた。

七、爐址

爐址は八個の竪穴全部に例外なく發見された。隅丸方形の大形竪穴に於ては、徑一米前後の、主として使用されたと思はれるもの一個と、小量の燒土を充たすに過ぎない小形のもの數個を見るのが普通である。（註十五）

方形の第一五二號に在つては、四個存したが、何れも小形の爐址で、激しく火が焚かれたとは思はれない。

又小規模な竪穴三個に就いて見るに、第一六五號の爐址が徑六十五糎に及び、燒土、灰層を多量に殘して居り、且つ小形のもの一個を伴つて居た外、第一六二、一六四號の二者は共に小形のもの一個のみが發見されて居る。大形竪穴の主要爐址は、全て二本の主柱の中間に位置し、側壁の短い邊に相對する點が共通して居る。小さい爐址の配置は不規則であるが、強ひて云へば柱の中間に多く、第一五五號の

如く、柱の直ぐ傍にあつて、火災の危險を感ぜしめるものもあり、竪穴の中央に存するものは第一五一號F.2のみである。

構造は單に床面ローム層を堀り凹めたに過ぎず、石にて圍ふ等特殊な遺構は見出されない。深さは五糎程度のものから、十五糎を超えるもの迄あり、大きさも又一樣ではなかつた。爐址内には燒土と灰層が充たされて居り、(註十六)後者は特に大形の爐にのみ殘されて居る。

さてこれ等の爐が、當時如何なる用に供されたかは現在明にされたとは云ひ難く、一竪穴内に於ける數の多少、大小、燒土の多寡、灰層の有無等が如何なる理由に基くか、我々は殆んど知る所がないのである。例へば土器を多量に出せる第一六四號には貧弱な爐址一個を見出したのみであり、同じく土器が豐富で、なほ平面其他に特殊な點の多い第一五二號に、これ又著しき爐址を見出し得ず、却て最小の規模を有する第一六五號に大形の爐址を見たこと等が我々の注意を惹くのである。かゝる爐址に見られる相異は單に竪穴存續期間の長短によるのみではなく、(註十七)先にも觸れた如く、竪穴の中に工房貯藏倉(註十八)等特別な用途を有する建築の存在を念頭に置く場合に、種々な示唆を含むものがあり、今後の發堀調査に於て十分なる注意がこの方面にも向けらるべきものと信ずるのである。

註八、第一五一號は一部を失つて居るがその復原に何等の危險を感じない程度のものである。

十、唐古等に極めて小形のものあり。

十一、第一五三號P.1 P.4

十二、第一五一號P.2 第一五二號P.3 第一五三號P.3

十三、柱穴なきもの和泉にあり。

十四、史學第十八卷第四號一〇七頁

十五、即ち第一五一、一五三、一五五號又第一一一號も同樣であつた。第一六一號は大形の爐址一個のみであつた。

十六、前二回の發堀に於ては木炭を出すものがあつたが今回は發見しなかつた。又燒土、灰は爐址により色調堅さを異にして居る。

十七、但し燒土、灰層の極めて多量なる場合は或程度迄時間的な點を考慮し得べく、先に第一五二號の床面に就いて考察を加へた際はその竪穴が長期に亙つて使用されたらうことを爐址の狀態より想像したのは矛盾ではあるまいと考へる。

十八、ドルメン、三卷七號　彌生式の住居址、森本六爾

追記

此の報告執筆者清水潤三氏が脫稿を前に突如應召された爲囑託竹下治作氏の懇切なる御指導を仰いで、幸にも殆んど完成されて居た原稿を基礎に此の報告書を作り上げた次第である。理論表現等の不整備は專ら私が責に任ず可きである事は言ふまでもない。

なほ第四圖以下の圖の縮尺は全部第三圖と同樣である。（河北展生）